
桃華姫

黒崎黒子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桃華姫

【Nコード】

N72390

【作者名】

黒崎黒子

【あらすじ】

日本人なら誰でも知っている昔々の話
その最後に書かれた一文を先生は指差した

『末永く、幸せに暮らしたとき』

俺は意味が分からず、首を傾げると
本当にそう思う？と先生は小さく笑った

その日の帰り道、どこにでもいる一人の学生は夜の寒さに急かされるように帰路への一步を踏み出したのだが…

時代を超えて読み続けられる『桃太郎』を題材にしたラブストーリー

ツキヨミ イクト
- 月詠郁兔

- 年齢：20

- 職業：大学生

本作の主人公。大学生では中の中。本当に普通の人。たまに飛び抜けた発言をして、周りを驚かせるが、本人は至って真面目。恋人居ない歴〓歳の数。でもこれには、ワケがある。これが後に大問題へと発展するのだが

トウカヒメ
- 桃華姫

- 年齢：不詳

- 職業：正義の味方

現代では知らぬ人は居ないほどの有名人。

名を桃太郎。单身、鬼ヶ島にて鬼を降伏させる。幸せに暮らしましたとさ、とは程遠い生活を送っていた。絶世の美女。頭脳明晰、スポーツ万能。何をやらせても、日本一。明るい性格で会う人、皆を元気にさせる。ただ、超がつく寂しがり屋

- 猿、雉、犬

桃華姫の元家来。今は人間で言えばアラファア（年齢50）。最近の悩みは高年期障害

昔々、あるところに

誰もが知っているようで知らない話をしよう

昔々あるところに、一人の少女が住んでいた

少女は大変に働き者で、朝は山へ柴刈りに昼は川へ洗濯に行き、空いた時間は団子作りに勤しんでいた

少女は大変にお金持ちであつたが決して無駄遣いするような者ではなく、もしもの時のためにと、せっせと働きお金を貯めている堅実な者だつた

さらにその容姿は並ぶ者なしと見る者全てに言わせるほど少女は美しかつた

噂を聞いた多くの大名が少女を娶ろうと遠路遙々やってくるほどだ少女は無理難題をふっかけることもなく丁重に断るのだが、大名は諦めることなく幾度も少女の家に訪れた

観念して少女が『二つ名』を明かすと大名は大変驚き、脱兎の如く逃げ帰つたそうだ

その少女、二つ名を「桃太郎」といつた

やつと、九十九人目の色ボケ君主が泣きながら帰つた日から話は始まる

その日、少女は相も変わらず団子を作っていた

蒸籠で黍きびと餅米を丹念に練つた物を蒸すと、用意しておいた桃を手取る

「ん、いい香りね」

鼻を近づけると果実の甘い香りが胸一杯に広がつた

皮を剥くと、より甘い香りが辺りに広がる

実を切り、すり潰すと布で包み、果汁を絞り出していく

蒸し上がったものに少量の砂糖と果汁を合わせて再び丹念に練ると、一口大に千切り丸めていく

「よし、できた！…でも、作り過ぎかしら？」

皿の上には桃太郎特製の黍団子が山のように積んである

とても少女一人では食べきれない量であった

頬をポリポリと掻き苦笑すると、調理器具を片付け団子を持って縁側に向かう

今日は八月十五日、中秋の名月だ

^{すすき}薄を飾り、団子と里芋、枝豆や栗を盛り、御酒を供えて月を眺める日だ

少女は満月を眺めながら、団子を口に放り込む

「んー！美味しい！我ながら、上出来ね」

自画自賛。しかし、その声に応える者はいない

鈴虫が鳴く声を聞きながら、苦笑すると酒を干し静かに天を仰ぐ

「お月様、あなたはいいわね。沢山の星たちに囲まれて。そんなあなたが羨ましいわ。星はいつも、あなたの側に居て瞬いてくれるもの。でも、私は一人。育ててくれたお爺さんもお祖母さんも今はいない。共に戦った仲間も今はもういなくなっちゃった」

膝を抱えて、月に照らされた庭を見る

とても広い庭。毎日、少女が手入れをしているため綺麗なものだが、

あるのは池のみなのでなんとも殺風景に感じる
昔はここで沢山の人々と日常を過ごしたものだ
育ての祖父母

幼い頃に出逢った三匹の仲間
礼を尽くすために訪れた人々
もう、この家を訪れる者は無く
また、去るものいない

「寂しいよ……」

祖父母は天寿を全うされ
三匹の仲間はそれぞれの故郷へ帰り
月日と共に、礼を尽くす人々の足も遠退いた
あれから、五年。二十歳になった私は膝を抱えて、涙を流す毎日が
続いていた

今現在、あるところに

「う…さむっ」

今日の昼は確かに暑かった

もう9月も中頃だというのに残暑が続く今日、昼から大学の講義に参加していた俺は完全な薄着

夕方くらいには帰る予定で出てきたのだが、民俗学の先生に呼び止められたのが運の尽き

次の日に講義で使う資料の準備に駆り出されたのだ

結果、解放されたのは夜も深日始める時間

秋らしい、少し冷たい風が肌を容赦なく撫でつける

「ふうー、寒い」

空に煌々と輝く月を恨めしげに睨みつけると、はたと気付く

「満月か」

雲一つない空には、ぽっかり穴が開いていた

残念なことに、現代では満天の星空というやつは見えない

満月を見つめながら、俺は先生の言葉を思い出す

きっかけは研究室にあった一冊の絵本

日本人なら誰でも知っている有名な話

「桃太郎ねえ」

先生は昔話を研究する有名な人だ

桃太郎、金太郎、浦島太郎、かぐや姫

一寸法師に鶴の恩返し

先生は幼い頃よりこういう話が大好きで、遂には民俗学の教授になつちやつた、ある意味、子供心を忘れない大人だった

俺は絵本を手に取ると作業そっちのけでパラパラとページを捲つていく

- 桃太郎 -

桃から生まれた桃太郎が鬼退治に向かうという話

両親から黍団子を餞別に貰った桃太郎は道中、イヌ、サル、キジと出会い黍団子を分け与えて家来にする

鬼ヶ島での鬼との戦いで勝利をおさめ、鬼が方々から奪つていった財宝を持つて郷里の両親の元に帰り、末永く幸せに暮らしました。と物語は締めくくられる

幼い頃に読んだ物と相違ない、慣れ親しんだ内容だ

本を閉じようとした俺を、先生は手で制すると最後の一文を指差した

『末永く、幸せに暮らしました』

意味が分からず首を捻ると先生は苦笑しながら、その理由を聞かせてくれた

実は桃太郎に由縁のある物や場所が日本中の至る所にあるらしい

先生はそこで桃太郎は日本各地を回ったのではないかと考え調査したのだ

桃太郎が旅をした理由は大体、予想できるだろ？と先生は笑つと作業再開を促して話を打ち切る

先生はどうやら、答えを見つけ出したようだ

「理由ねえ」

まん丸な目を眺めてポツリと呟く

「黍団子の普及かな？」

夜空に浮かぶ月が黍団子に見えて仕方なくなり、思わずそんなことを口にしてしまった

きつと…それが誰かの怒りに触れたんだろう

「う…さむっ！こんなことしてる場合じゃない。早く、帰ろ！」

寒さから逃れるように走り出した俺の足元に大きな穴が一つ開いていた

「え？」

気付いた時にはもう遅い
落ちる感覚に捕らわれた俺は次に来るであろう衝撃に備え、身を丸めるしかなかった

セールスマン

「いつつ…ここは？」

穴に滑り落ちた俺は、広い空間へと投げ出された
痛む腰をさすりながら、ゆっくりと周りを見渡す
落ちた時間はそう無かったから、距離はないはずだ
今し方、自分が落ちてきた天井を見上げるが、穴なんて一つも見えない

「穴がない！？」

というか、ここは本当に地中だろうか？
見上げていた目線を下ろせば見えるのは、机、椅子、カウンター、
そして

「いらっしやいませー」

黒いスーツを身に纏った男
男はカウンターを挟んで向こう側に立っていた。目が線なのは氣になるが、その営業スマイルは完璧で爽やかな印象を与えてくる
この人、今、何て言った？

「いらっしやいって、あんた、何者？」

「私^{わたくし}、セールスマン」

「セールスマン？セールスマンが何で、こんなところにいるんだ？」

「こんな地下にすることが不思議ですか？」

「やっぱり、ここは地下なのか」

「ええ。地中です。深い深い。それこそ、次元が変わってしまうくらい深い穴。その地下にあるのが、我々、鼠々（チュウチュウ）カンパニーでございます」

口元を吊り上げて、セールスマンは笑う

「カンパニー！？ここ会社なのか？」

「驚きました？驚きましたね？驚いて当然！そうです！ここは穴から入った不思議な世界！アリスワールド！そしてあなたは迷えるアリス！」

妙に芝居掛った口調のサラリーマン

そんな彼に今、物凄く言いたいことがある

「…殴っていいか？」

「ナンセンちゅ！暴力で全てが片付けば楽ですが、それでは世界に争いしか生まれません。そんなことにならないため、人には言葉を与えられたのです。お分かりですか？」

「つまり、話し合えと？」

「イエス！聡明で助かりますね！お分かり頂けたところで、お話し合いを致しましょう。率直に言いますと、あなたにやって頂きたい事があるのです」

「俺、急いでんだけど？」

昨日はレポート作成で徹夜

おまけに、先生の手伝いでへ口へ口

正直、早く帰って寝たい

「あ、ご安心を。ここには時間の概念はありませんから」

言われて腕時計を確認すると学校を出たくらいの時間で針は停止していた

壊れたかと思いケータイを確認するが、こちらの時間も腕時計と同じ時間を示して停止していた

「うそだろ？」

「ご確認はお済みですか？では、説明に入ります。あなたに、ある方を救って頂きたいのです」

「救う？」

「ある世界で苦しんでいる方がおられるのです。その方を救ってください。手段は自由です。私どもでその方が救われたと判断致しましたら、元の世界に帰して差上げます」

「何で、俺なんだ？見ず知らずの人間に頼むより、知り合いの方がそいつもいいんじゃないのか？」

「あの方にはもう頼れる人がいないんです。あなた以外には」

「どういう意味？」

「それは、あなたの目で確かめてください」

「ふむ」

”あの方”とかいうヤツがどんな人物なのか気になるが、目の前のサラリーマンは教えてくれる気はないようだ

「断れば？」

「あの方が、悲しみの淵に沈むだけです」

サラリーマンは、悲しそうに呟くと小さく頭を振った

「…はあ、分かったよ」

「ありがとうございます！それでは、ご契約内容をご確認の上、こちらにサインをお願いします」

「契約内容？」

サラリーマンが笑顔で差し出す書類を受け取ると、さらりと目を通していく

「お客様のバックアップは当社が全力を持って行います。お客様は思うまま、行動して頂いて結構です。目標達成のために頑張ってください。困ったことがありましたら、こちらの電話番号にご連絡ください。また、これから向かう世界はお客様の世界とは全く違う世界です。今までの常識は通用しないと思ってください。分からない

場合は、”あの方”にお聞きください。ここまでで、ご質問はありませんか？」

「違う世界って何？」

「人によつては過去とも言えますし、パラレルワールドとも言えますし、はたまた世界自体が違つとも言えます。ただ、はっきりしていることは一つ。確かに、その世界は『ある』ということです」

「確かにある世界ね」

「そして、あなたと大変に関わりが深い世界です」

「そこが分からないんだよな」

「それは、あなたが…」

「直接確認してくださいって言うんだろ？分かったよ！」

契約書の署名欄に名前を書き込むとペンをサラリーマンに投げ渡す

「はい。確かに。それではこれは、ご迷惑をお掛けするお詫びです。お好きな物を、お好きなだけお持ちください」

サラリーマンがカウンターの下から出したのは、刀、銃、手裏剣、鎖鎌、ヌンチャク、ハリセン、ピコピコハンマー、メリケンサック、その他諸々の危険アイテム

「おい。待て…まさか、これから行く世界って、戦場だったりするのか？」

「あはは…戦場なんてあるわけないじゃないですか！まあ、物騒な所に変わりはありませんが…」

「何っ！？」

「契約破棄は出来ません…もし、破棄すれば重大なペナルティーが架せられます。これはビジネスですよ、お客様」

サラリーマンはチュウチュウ笑うと、契約書を突きつける

「くっ！？…詐欺だろ？こんなの説明不十分で契約は無効だ！」

「ここ、ご覧ください」

サラリーマンが指差したのは契約書の下の方

『これから飛ぶ世界についての説明』の項目を指差した。

大変、物騒！ご注意を！

なんて書いてある

つまり、契約書をよく読まなかった俺にも落ち度はあるわけで

「怪我とかの保証は？」

「当社は一切の責任を負いません」

「悪徳すぎる！」

「冗談ですよー。死亡した場合、葬儀代くらい出ますから、ご安心を」

「ああ、なるほど！それは安心って…できるか！死亡！？なにそれ！？」

頭を抱えて混乱していると、チリンチリンと上からベルの音がする

「あ、そろそろ。出発の準備が整ったようです！さあ、さくさく武器を選んで逝ってください！」

「逝って」って言った！今、逝って」って言ったよな！？」

「あーはいはい」

サラリーマンは面倒くさそうに適当な相槌を打つと、その辺の武器をひつつかまえて俺のバッグに詰め込んでいく
それも無理やりなもんだから、バックはパンパンな上にチャックが閉まりきっていない

「雑！」

もう、涙が出ない

「男なら四の五の言わず、さっくりきつちり仕事を終わらせてください。はい、パス！それではお願いしまーす！」

俺にバッグを投げ渡すとサラリーマンは手を上げる

それに反応するように再びベルが鳴ると突然、床が抜けた

穴に落ちる間際、サラリーマンの声が聞こえる

「グッド、ラット！」

「……それ、駄洒落？」

面白くもないオヤジギャグにツッコミを入れながら、俺は真っ暗な闇に吸い込まれていった

よっ！日本ー！

「冷た！？」

衝撃に備えて身を丸めることもできないまま、俺は水の中に放り込まれた

一瞬、上下が分からなくなったが脚を着くことで、何とか平静を取り戻す

立ち上がり、滴る水を切ると状況を確認した

「ここ…池？」

目に入ったのは膝上くらいの水。小さいながらも立派な池だ
次に目に入ったのは、水面に映る満月。上を見ると、穴なんかない
あるのは、満天の星空と大きな丸い月だった

「また、穴ないし。俺、本当に穴に落ちたんだよね？」

「ねえ。あなた、そんなところで何してるの？」

「え？」

一体、どういった仕組みなのか分からず首を捻っていると、後ろから女の声が掛かった。振り返ると、不思議そうにこちらを見つめる少女が立っている

浴衣からすらりと伸びる手足は傷や痣もなく、思わず触れてしまいたくなるほど綺麗な肌をしていた。流れるような黒髪はその細い腰まで下ろされ、真ん中で分けた前髪から覗くは強気な瞳が真っ直ぐにこちらを見つめていた

俺の知る女性など足下にも及ばない程の美人
あまりの美しさに、目を奪われていると少女は苦笑しながら手を差し出してくる

「とりあえず、上がったら？寒いでしょ？」

「あ、ああ。ありがとう」

差し出された手を取り、池を出ると少女は俺の格好をまじまじと見つめた

「えっと、何？」

「あ、ごめんなさい。あまりに珍しい格好だったものだから。あなた、どこかのお坊ちゃん？」

「いや？普通も普通。庶民だよ？」

「平民？それにしても変わってるわね。あなた、名前は？」

「月詠郁兔」

「ツクヨミイクト？名前まで変わってるのね？」

何度も反芻するように俺の名を小さく呟くと深く頷くと、優しくな瞳が俺を見つめた

「私の名は桃太郎っていうの」

「…え？ああ、うん。よろしく」

誇らしげに胸を張る少女。思わぬ名前に、俺は間の抜けた声を出してしまった

「ぶー！なによー！その反応！」

「いや、君の方が珍しい名前だっと思ってさ。そうか、桃太郎っていうのか。なんか、鬼も倒せそうなくらい強そうな名前だね」

最近漫画やアニメ、芸能人から名前を取る人も少なくない
きつと親御さんが、強くなるようにと願いを込めて付けた名前なの
だろう

うん。我ながら無理のある解釈で必死に納得しようしていると、少女
が顔を近付けのぞき込んでくる

「へえ…私のこと知ってるんだ。そうよー。今から十年前。三匹の
仲間と共に鬼退治したのがこの私、桃太郎よ！」

ふふ〜ん」と鼻をこすり、腰に手を当て胸を張る
分かつちやいたけど、こいつ…胸でか！

「そ、そうなんだ。君が桃太郎…はあ！？」

「な、なによ？」

「桃太郎ってあれだろ？桃から生まれた、桃太郎。餞別の黍団子で、
猿と雉と犬を味方にして鬼ヶ島に乗り込んだヤツ。あれがお前だっ
ていうのか！？」

「あら、よく知ってるわね？青年、実は私のこと好きなの？」

頬に手を当て、頬を染めながら、イヤイヤと品をつくる

「いやいや、そうじゃなくて！桃太郎って男だろ？」

「……ほれ」

少女は身を寄せてきたと思うと、腕を絡めて胸を押し付けてくる

「ばっ！柔らかか…！じゃなくて、近い！近い！」

「何言ってるのよー。近づかなきゃ分からないでしょ？」

「何がしたいのか、分からない！」

「どう？ちゃんと女の子してるでしょ？分からないなら、実際に見せてあげましょうか？」

「分かった！分かったから！お前は女！間違いなく女だよ！だから、離れてくれ！」

「はあ…青年、分かってないわねー。そんなに簡単に認めちゃダメじゃない。ここはほら、本当に女が確かめてやるって襲うところでしょ？」

「誰がやるか！」

「ちえー、私はいいのに…」

少女はつまらなさそうに口を尖らせると腕を解き、くると回って俺を見上げた

こいつ…本気で言ってるのか？

改めて少女を上から下までゆっくり眺める

流れるような黒髪。強気な目。艶やかな唇。浴衣からスラリと伸びる肢体。腰は細いが、お尻は肉付きもよく形がよい。何より、凶悪な胸。まさに、美少女の黄金比を完璧に再現したような女

日本一の名は伊達じゃないってことか

「ん？何？私に興味、持ってくれたの？」

「確かに、君は凄く綺麗だよ」

「…あ、ありがとう。な、なんか…面と向かって言われると恥ずかしいわね」

照れくさそうに、はにかむと少女は手を伸ばす

「このまま、ぐずぐずしてたら本当に風邪ひいちゃうわ。家にいらつしゃい、イクト」

「え？いいのか？」

「いいわよ、イクトが悪いヤツじゃないって分かったから。それに、イクトにも興味が湧いたし」

「何の面白みもない、普通の男だよ」

小さく苦笑すると、彼女の手を握る
温かくて柔らかい小さな手

それは本当に女の子の手で、とても鬼退治を成し遂げた人間には見えなかった

「イクト。あなた、大きいわね」

手を握った桃太郎は再び、まじまじと見つめる

「別に普通だろ？君も女性の中じゃ、普通くらいだし」

「普通？冗談やめてよー。村の女と比べたら頭一個分違うんだから。それこそ、村の男たちと同じくらいだし。イクトは村の男と比べたら頭一個分大きいくらいかしら。きっと、良いもの食べてたのねー」

「ああーそういうこと」

桃太郎の時代がいつかは知らないが、昔の人は食べる物があまりよくない

小さい頃から、肉やら魚やら栄養ある物を食べる現代人と比べて、如実に成長に差が出るワケだ

「まあ、あなたのことは追々、聞いわ。今は早く、温まらないとね」
「すぐにお風呂の準備するから、待ってて」

「ああ、本当に助かるよ」

「いいのよー。困った時はお互い様ってね」

彼女は俺を家に招き入れると、着替えを渡してどこかに行ってしまった

たぶん、お風呂の準備してくれているのだろう

このままじゃ風邪をひきかねないので、その間に着替えることにする

「和服か、成人式以来だな」

服は勿論、下着まで脱ぐと囲炉裏の側にかける

下着は流石にまずいかと思ったが、乾かないことには履けもしないから許してほしい

着付けを終え、しっかりと帯を絞めると囲炉裏に近づく

「ああ。温かい…」

しばらく火に当たっていると体が温まってきたおかげか凄い眠気に襲われ始める

今眠ってしまったのは、失礼に値するよな

せめて、彼女が帰ってくるまでは起きてなきゃ

「う…でも、眠い…」

分かってはいるのだが…昨日はレポートで徹夜

帰って寝ようと思えば資料整理に加え、先生の長話

おまけによく分からない状況に置かれて心身ともに、もう限界だった

「ぐう…」

「お風呂できたわよーって、あら？寝ちゃったか…。どうしようかしら。起こす？ううん、無理に起こすのも可哀想よね」

準備を整え、イクトの洗面器とタオルを携えた桃太郎が戻ってくる
と囲炉裏の前でイクトが眠っていた

いつも使っている自分の布団を囲炉裏の横に敷くと、イクトを横た

える

「起きてないわよね？それじゃ、お風呂は先に頂くわ。ゆっくり休んでね、イクト」

寝ているイクトの髪を手で軽く梳くと、桃太郎は小さな微笑みを浮かべ居間を出て行った

美しき女とワケあり男

「ん…桃太郎？ん…？」

桃太郎の声が聞こえた気がして、布団からのっそりと起き上がる一体、どれくらい寝ていたのか気になり、携帯で時間を確認する

「なんだ…まだそんなに時間は経ってないじゃん」

囲炉裏の前に座ってから時間はさほど経っていない寝ていた布団の脇を見ると、タオルと洗面器が置いてあった

「…風呂できたっぽい？」

眠い目をこすりながら立ち上がると、風呂場を探して歩き始める居間を出ると薄暗い廊下があった

長い廊下の先に戸口があり、僅かに開いた隙間から灯りが見える

「ん…あそこかな？」

灯りがある、ということは少なくとも誰がいるわけだ風呂場じゃなければ、中にいるヤツに聞けばいいだけだ

「お邪魔します」

戸口を開け、中に入ると脱衣所があった

「お、ビンゴー」凄いでー俺」

自身の感の冴えを称えながら手早く服を拭と、タオルを肩に掛け、浴場の扉を開け放った

「ん？あ、起きたんだ」

目の前には一糸纏わぬ女性が水を滴らせながら立っていた

「な、ななな！？」

「どうしたの？」

不思議そうな顔で女性は近付くと、俺の顔を覗き込む

「も、桃太郎？」

「ん？なーに？」

「何で、お前……」

「イクトが寝ちゃったから、先に入ってたのよ？」

「あ、先にねー。ははは……し、失礼しましたー！」

「ちょーっと待ちなさい、イクト」

桃太郎は慌てて出ようとする俺の手を掴むと、軽く引き寄せる
バランスを崩した俺は、そのまま桃太郎に抱き留められてしまった

「むーむむー！？」

「ひゃ！く、くすぐった…」

目の前には、たわわが！

これはヤバいと思い必死に離れようとするが、桃太郎はそんな俺を逃がすまいと頭を抱え込む

「ふふ〜ん♪逃がさないわよ〜！イクト♪嫁入り前の女の裸を見たんですもの。タダでは帰さないわよ？責任、取りなさい♪」

「ぷは！せ、責任！？」

「そ！責任♪」

桃太郎は頭を解放すると、妖美に微笑み舌なめずりした

「貴重な体験…させてあげる…イクト」

「も、桃太郎さん？」

「ふふ………♪」

「あつ…ん、気持ちいい…いいよ…イクト…ん、んん！？イクト…ちよつと、強いよ！んん…！」

俺の手の動きに合わせて、女が反応する

肩越しに振り返る彼女の目にはうっすらと涙が浮かんでいた

「あ、ごめん…」

洗う手を止め、背中を確認すると綺麗な肌が少し赤くなっていた
しまった、力を入れ過ぎたか

「もー、女の子の肌は繊細なのよ？もっと、優しくしてちょうだい
？」

ブクーっと頬を膨らませた彼女は、優しくね！と念を押すと、前を
向く

「悪い、女の子の身体なんて触れたこともないから」

「ええ！？嘘？イクト、経験ないの！？」

「経験？」

「コレよ、コレよ」

左手の親指と人差し指で輪っかを作り、右手の人差し指を輪っかに…

「してないよ！ていうか女の子が、んなことすんな！」

手を握りしめ、顔を真っ赤にして首を振る

「ふふ…イクトってば、初ねウラ」

「るっせ」

悪態を吐くと、くすくす笑う桃太郎の赤くなっている背中を一撫で

する

「ん…くすぐった…。でも…そうなんだーイクトなら引く手数多だろっにね？何でだろ？」

「ないない。告白だって一回も無いんだから」

「ええ！？告白も！？」

「そうだけど？って前！前、見えてる！」

何をそんなに驚いたのか、彼女は目を見開いて振り返る
当然、視界には絶景が広がった

これはもう眼福…ごほん、ごほん！
じゃなくて、えーっと…そう！大変だ！

「そんなのいいのよ！それより、今は聞き捨てならないわ！」

「よくないっての！」

目を背けながら、長いタオルを差し出すと彼女に背を向ける

「だから、別に見てもいいのに。イクト、本当にスレてないわねー。
ほら、大丈夫だからこっち向いて？」

「巻いた？」

「ちゃんと巻いたわよ。大丈夫だから、こっち向きなさいって」

「あ、ああ」

振り返ると、彼女はちゃんとタオルを巻いていた
ホツと胸を撫で下ろし顔を上げると、彼女の手が伸びてくる

「んー…顔はいいわよねー？」

「え？」

「身体つきも男らしくていいわよー？」

「え？なに？」

「彼処は…うわ…大きい／＼／」

「ちよっ！？何、剥いでんだよ！タオル返せ！」

慌ててタオルを奪い返すと、腰に巻く
本当に信じられないことするな、コイツは

「じゃあ、何で…ん？んん？ああ！そういうことか！」

「ったく…どうした？」

一人なにかを納得したように何度も頷くと、桃太郎は指を差してくる

「イクト！謎は全て解けたわ！」

「なんだよ」

「簡単よ、イクトが良い男過ぎるの！」

「は？」

「つまり、良い男過ぎるから周りは当然、イクトに良い女が居ると思うわけ。で、自分と想像の女を比べる。想像は強いからねー、みんな最後は自分から勝負を降りるのよ。イクトもそんな経験ない？」

「言われて見ればあるなー。可愛い子や美には彼氏が既にいるって思うんだよな。ていうか、付き合えたとしても吊り合わないって思っただ体は諦める」

「それよ」今まで、周りの女性も同じだったのねー」

「はは… なわけないって、俺は何の変哲もない普通の男だよ」

「もー、強情ねー。なら、日本一美人の私が断言してあげる。あなたは日本一の色男よ」間違いないわ」

満面の笑顔を浮かべて、確かに日本一美しいと思う女性は自信満々に言い放った

「ははは… 凄い自信だな」

「当然！だって私は日本一の女！桃太郎さんですもの」

自慢げに胸を張る姿は、かなり様になっていた

彼女は本当に心から自分というものを信じているのだろう
俺にはその姿がとても眩しく見えた

「ああ、確かに。君みたいに綺麗な女性に言われたら少しだけ自信も出てくるよ」

「ふふ…でしょ？さあ、色男さん♪次は私が背中を流してあげるわ。座りなさい」

桃太郎は立ち上がると、ニコニコと俺の背中を押す

「え？あ、いや、いいよ！自分でやるから！」

「あ…」

気恥ずかしさから、桃太郎の手を逃れるように避ける
すると、笑顔いっぱいだった表情が一変、寂しそうな顔を見せた桃太郎は俯いてしまった

「桃太郎？」

「っ…あはは！な、何でもないわよ！うん！そうよね！会ったばかりなのに、恥ずかしいわよね！ごめんなさい！私、出るから！本当、ごめんなさい！」

「あ、いや…」

明らかに取り繕ったような笑みを浮かべ小さく手を振ると、慌ただしく桃太郎は出て行ってしまった

「…なんか変だったな」

勢い良く閉められた扉を茫然と見つめながら、彼女の様子を思い出す
恥ずかしいからといって避けたのはまずかった
あれで気分を害したのは間違いないだろう

でも、気になるのはあの表情
一瞬の表情に浮かんだのは怒りではなく、寂しさ
そして、その瞳に見えたのは

「怯え？」

あれほど自身を誇っていた彼女が、一体何に怯えるというのだろうか

「気になるな……。でも……」

俺は彼女のことを知らない

本当に彼女が、俺の知る桃太郎なのか

もし、本当に桃太郎だったとして、その後何が起きたのか

彼女が今、どういう状況なのか

彼女の怯えるモノが何なのか

俺は知らない

考え出すと止まらなくなっていた

彼女の顔が頭の中でぐるぐると回りだす

「気になる、とっても気になる」

この男、月詠郁兎は普段、平々凡々の人間である

しかしながら、大学では教授たちから絶大なる信頼を得ている人物
でもあった

それは何故か。全ては彼の性格にある

彼は幼い頃より、一旦その探求心に火が着くと何処までも調べ尽くす、ちよつと危ない性格だった

それは成人になっても変わらず、大学の図書館にある本を全て読み

漁り、その翌日、変わり果てた姿で発見されたこともしばしば
時には先生を拘束して、全ての知識を吐き出させたこともあった

そんなことを繰り返していた彼を、大学の教授たちと生徒は畏怖と
敬意を込めて

『M A D I N Q U I R I N G M I N D 狂った探究心』
と呼んだ

彼は立ち上がる上だと、先ほど少女が出て行った戸を睨みつけた

「桃太郎：お前の全て、俺が暴いてやる」
目を爛々と輝かせながら、郁兔はそう小さく呟いた

幸せに…

「……」

イクトを残し、風呂場を飛び出した私は衣類をひつつかまえて、居間へと飛び込んだ
イクトは追ってこない。恐らく、私の突然の行動に混乱しているのだろう

「あ、危なかった」

危うく感情をさらけ出すところだった

流石にまだよくも知らない相手にこの気持ちを悟られるわけにはいかない

「特に…イクトには絶対」

話しぶりからして、かなり深いところまで、彼は私のことを知っているだろう

しかし、それはどうやら私が幼い頃の話までのようだ

彼はきつと、私の今の姿は知らないだろう

私が今、どういう立場に置かれているのか何を感じ、何を思い、何を畏れているのか

絶対に彼には知られたくない

だって彼は、私の名を誉めてくれた『初めての男』なのだから

今まで沢山の男たちが私の元を訪れたが

誰一人として、私の名を誉めてくれる人は居なかった

私の名を聞けば、皆、恐れて逃げていくのだ

それでも私は十人、二十人と訪れる人が増えても『鬼を倒した者の名』を高らかに名乗り続けた

だって、この名は愛する祖父母が付けてくれた、この世でたった一つの名

それを誇りとし、感謝を込めて名乗ってきたのに、皆は引きつった笑いを浮かべて私の前から姿を消した

五十人、六十人、どんな大名や坊ちゃんが来ても名乗り続けるそうしているうちに、疑問が生まれた

『私の名は、なぜこんなにも恐れられているのだろうか？』

そんなあるとき、都で私の噂を聞いた

『桃太郎は人の子ではない。桃から生まれた化け物だ。だから、子供のクセに鬼も倒してしまったのだ』

『実は桃太郎は鬼の子だ。鬼は倒しておらず、財宝だけを貰って帰ってきた卑怯者だ』

などなど、耳に入ってくるのは身に覚えのない噂話ばかり

私は憤怒し、噂の出所を探った

探るのは簡単だ。何せ、噂を辿ればいいのだから

しかし、噂の出所を知って私は後悔した

噂の出所は『私の助けた人々』だったのだ
思い返せば、納得のいく話でもある

鬼に襲われ、苦しんでいた村人たち

彼らは、私が訪れる前から鬼に苦しめられていた

鬼は女を攫うと孕ませては産ませ、孕ませては産ませ、ただそれを
繰り返した

やがて女は心が壊れ、最後は自ら命を絶つ
そうなれば、また新しい女が攫われた

遺族、親類、恋人は鬼を倒した私を見て、何故もつと早くに來なかつたのかと激怒した

奪われた宝はいらないから早く出ていけと、鬼から奪い返した宝を
投げつけられた

当時、私は子供だったので、なぜ村人に怒鳴られ、なぜ虐げられたのかも理解できぬまま、ただ混乱と悲しみに暮れ故郷に戻るしかなかった

噂の出所を突き止めた私は、近隣の村や都を探った

噂は行く先々の村や都にまで広がっていた

故郷に帰ればの村人たちまでもが噂を知り私を恐れていることが分かった

だから、昔、家をよく訪れていた人々の足も遠退いていたのだとその時、初めて気付かされたのだ

私は家に帰るとひたすら泣いた

これ以上人と関わり、嫌われ、恐れられ、離れていくことが怖くな
って家に引きこもった

しかし、引きこもりもそう長くは続かない。家にある食料が底をつ
いてしまったのだ

空腹に耐えかねた私は、食料を調達するための家をでることにした

『怖い…怖い…人が…外が…怖い。でも、お腹が…』

しばらく、戸口で外を眺めていた私は腹の虫に急かされる形で、何
とか家を飛び出す

『村は駄目…。顔が完全に知れてるもの…。そうよ…都なら…』

私は、僅かな期待を胸に、ビクビク震えながら都へ出た

しかし、私の顔を見た皆は、恐れ多様な表情を見せた後は目も合わ
せない

そして、何も売ってくれない

私は…更に絶望した

生きるために思案し、私は顔を隠して買い物に出た

怪しんだ者も居たが、旅芸者だと告げると同情したように苦笑して
オマケをくれる

難なく買い物が出来る上に、女一人の旅芸者とだと分かると優しい
対応

『皆のために闘った桃太郎』と『旅芸者』の扱いは雲泥の差だった

それがあまりに悔しく滑稽で寂しくなった私は、買った桃を泣きな

から食べ、沈む夕日を背にして一人帰路に着いた

あの時の桃の味は今でも忘れられない
甘くてとろけるようで、しょっぱくて…あんな不味い桃は今まで食
べたことがなかった

次第にそんな生活にも慣れ、人と関わらないようにして過ごした

心も擦り切れ、寂しさに押し潰された私は命を絶つことにした。誰
にも知られずひっそりと死のう。そう決めた私は今まで頑張った自
分へのご褒美に月見をすることにした

そんな時、彼は現れたのだ

「イクト…」

初めて見た時、私の頭からは自害なんて言葉は消え去っていた
初めて一目惚れというものをしたのだ

水も滴る良い男とはよく言ったもので、彼は本当に私の理想のよう
な男だった

しかも、捏造された噂を知らない男であり、名前を聞いても逃げない
おまけに、名前まで誉めてくれた

『強そうな名前だね』

決して、女の子に喜ばれるような言葉ではないと思うが、名前を恐
れられてきた私にはそれがとても嬉しかった

「そんな彼も噂を知れば変わってしまうのよね」

優しくしてくれた村人たちのように
だから、知って欲しくない

なのに…

「ふーん。どんな噂？それって逃げ出した理由と関係あるのかな？」

彼は爛々と輝かせた瞳で居間の入り口に立っていた

「…な、なんのこと？」

「なんのこと、だって？それは、桃太郎。君が今、一番分かっているんじゃないかな？」

「ぐっ…」

「噂ってことは…外の人たちも知っているだろ？」

「っ…」

「聞けば分かる」

「やめて…」

「なら、自分の口から話してよ、桃太郎」

「…いやよ」

「…そうか、なら俺は俺のやりたいようにやる」

「え？」

言葉の意味が分からず、首を傾げた瞬間、彼は私に覆い被さってきた反応の遅れた私は抵抗する間もなく、布団に押し倒されてしまう驚く私を見下ろすように、青年は微笑むと手を伸ばして、優しく頬を撫でて来た

「桃太郎…」

「い、イクト？」

「頼む。話してくれ。知りたいんだ、君の全てを」

「わ、私の？す、全て？」

「君が生まれてから、今に致まで。何があつて、何を感じ、どう過ごしてきたのか」

「んん！？や、だめ…」

彼の手が頬を、首を、唇を撫でていく

「幸せに、なりたくはないか？」

「ん！幸せ…？あん！」

「君の描く幸せはなんだ？」

「はあ…ひゃん！？…私の、幸せは…んん！」

温かい手が、私の敏感な場所を撫で回す

「はぁはぁ…イクト…私…私…」

「幸せになりたいわけではないのか？」

「なりたい…私…幸せになりたい！」

涙が止まらない。見られたくないのに、こんなに近くに彼がいる

「大丈夫…君は幸せになれる」

「つぐ…私は幸せになれる？…」

「なれるよ。君は幸せになるべくして生まれて来たんだ」

大きな手が、泣きじゃくる私の頭を撫でる

心が安らかになっていく

絶望に満ちた心が、涙で洗われていく

知らなかった。世界には、こんなに温かい人もいるんだ

「さあ、涙を拭いて」

「ん…ええ」

「二人で、幸せになる方法を考えよう」

「分かったわ…」

私は深く頷くとイクトに全てを打ち明けた
語っている最中も彼は微笑を絶やさず、ずっと私の目を見つめ続け
ていた

「噂、ね…そういうことか。君の全て、確かに受け取ったよ。話し
てくれてありがとう。桃太郎」

彼はそう呟くと、私の頭をぽんぽんと撫で微笑む
胸が高鳴る。この人なら、イクトなら信じてもいい。そう、感じた
だから、いいよね？お爺さん、お婆さん
私、イクトを信じてみる

「…桃華」

「え？」

「私の名前は桃華っていうの。」桃太郎”は私が鬼に攫われないよ
うに、祖父母が付けてくれた二つ名なの」

「そうなんだ。桃華…うん！綺麗な名前だ。君によく似合ってるよ」

イクトは頷くと、もう一度私の頭を撫でる

「でしょー？日本一の女に相応しい名前よね！」

照れくさくて、そんな言葉を返してしまう。長年、人と接触がなか
ったから謙遜なんて言葉忘れてた。軽く自己嫌悪

「ああ。本当、そう思うよ。君は凄く、綺麗だ」

それでも彼は笑顔で頷くと、髪を撫でる
今更ながらに、二人の状況を確認する

「ぼっ！！！」

「ん？どうした？」

「わ、わわわ私…は、裸！？」

「ああ、そうだよ？俺が脱がせた」

こ、この男は

「い、いつの間に？」

「人と対面したのは、久しぶりだったろ？身体が緊張でガチガチだったよ？身体の緊張は、心にも大きく影響する。話しをするんだから、身体の緊張を取らなくちゃいけなかった。だから、全身をほぐしたのさ」

覆い被さってからの情事には、そういう意味があったんだ
私は改めて、関心させられる

「で、でも、脱がす必要がある？」

「綺麗だったから」

「…答えになってないわよ？」

ジト目で睨むがイクトはやはり飄々としていた

こゝこの男は…

「抱きたくなつた」

「だ!？」

そのくせ、突然、こんな事を言いだす始末
本当!この男は!

「抱きたくなるほど、綺麗だったから脱がせた」

「はあ…あなた本当に風呂場で狼狽えていた男? 凄く、積極的じゃない。まあ、肌を見せるくらい一緒に風呂に入つた仲だしいいけど…んんっ!?!…んーっ、ちゅ」

話してる最中に突然、唇を塞がれた
頭が真っ白になっていく

「ちゅ、はあ…イクト…? どうして?」

「言つたろ? お前を抱きたくなつた」

「え? んっ、ちゅ…本気だったの?」

「俺はいつだって本気だ。だめか?」

「わ、私はいいけど…でも、イクトはいいの? その私、なんかで」

「なんか、じゃないよ。桃華。君は日本一の女なんだろう?」

「あ…、ふふ…ええ、そうね。そう、私は日本一の桃太郎。そして、あなたは私が認めた、唯一の男。いいわ。イクト、私をあなたのモノにして。でもその、優しくしてね？私、初めてだから」

「…分かった。約束する」

一瞬驚いた顔をしたイクトだが、深く頷くと再び、唇を重ね、互いの全てを求め合う情事へと没頭していった

幸せのために

「気持ちよさそうに寝てるな」

「ん…」

隣で眠る少女の頭を撫でると、頬にキスをする
くすぐったそうに身じろぎした少女は俺の手を取ると頬擦りした

「ふふ…起こすと悪いな。このままにしとくか」

指で頬を撫でながら、これからのことに思考を巡らす

「やっぱり、ここは桃太郎の時代なんだな」

話を聞いてやんわりとイメージが出来た。この子は本当に苦労してきたんだな。幸せになってほしい。そのためにはまず、問題を整理しないと

「桃華が苦しんでいるのは、噂が原因なんだよな…その噂をどうにかしないと」

桃華の噂は、もはや伝承や伝説と変わりのない。潰すには相当のインパクトが必要だろう。本当のことを言っただって、村人や都の連中は耳も貸さないだろうな

潰すなら、とびきり魅力的な噂じゃないと

「噂か…」

『鬼の子、化け物と噂される桃太郎』

これを払拭するにはより強いプラスのイメージしかない

「なら、目には目を。噂には噂を流すしかない。…普通の噂じゃつまらないな。脚色してみよう。マイナス要素は消して、変わりに悲話を織り交ぜると効果的かな。ん…一度、まとめよう。何か書くものは…ないな。あとは…バツクか。アレ、開けたくないんだよねー」

布団を出ると部屋の隅に置いてあるバツクに近づく

「うわ、パンパンじゃん。この出てる棒って…ピコピコハンマー？パチンコ…？それに紙風船？え？これで、どうしろと？ここって物騒な場所なんだろう？」

パチンコはギリギリ大丈夫としても、ピコピコハンマーで敵を倒せるのか？ヨーヨーなら、テレビで刑事が使ってたみたいだから大丈夫かもしれないけど、ピコハンや紙風船は無理でしょ？これは完全に嫌がらせだ

「まあ、今はいいや」

紙とペンを取り出すと、頭に浮かんだ言葉を書き連ねていく

「桃、桃太郎、祖父母、黍団子、三匹の家来、鬼、噂、村人、都、大名…」

一つ一つを線で結び、関係や背景を洗い出していく

「噂を広めたのは、助けた村人だったな。この村の人間じゃなく、鬼の住処の近くにあった村の人間。鬼は一般的でこの村にも時々現

れていたようだ。鬼が居る世界か。そりゃ、物騒だ」

改めて、バックを見る。中には心許ない武器たちと、講義で使った教科書と筆記用具。ふっ…何もできないよ

「いや、待てよ？」

バッグの中を漁る

「絵の具…」

バッグのサイドポケットに入っていたのは、昨日講義で使った絵の具だった

大学で絵の具？と思われるかもしれないが、先生も講義を分かりやすく、楽しくなるよう努力しているんだよ、うん

「これは使えるな」

俺は絵の具を握りしめ、ニンマリ微笑む

さっきの関係図に『絵の具』と書き込むとページをめくり、『桃太郎人気アップ大作戦』の計画を練り始めた

「ふふ…出来た」

シナリオを完成させた俺は桃華を見る

「すうー…すうー…」

「ふふ…。ん…ふあ、眠い」

よく寝ている。桃華の髪を撫で、ほくそ笑むと眠気が襲ってきた
全ては桃華が起きてから、いや、皆が起きてから勝負は始まる

必ず、この少女を幸せにする

そう心の中で呟き、桃華を抱きしめ眠りについた

携帯少女

「ん…ん…？」

「あ、起きた？」

目を覚ますと、目の前には綺麗な女性が覆い被さっていた

「何してる」

「んー？イクトの可愛い寝顔を堪能してたの」

「へー。どけ」

「や」

「どいてください」

「や」

「くっ、希望は何だ？」

「ん？えつとねー。んー…」

「何のつもりだ？」

「接吻♪」

「ふっ…それは確かに魅力的な提案だな。君みたいな美人に朝一番

から襲われるなんて男なら諸手を挙げて喜ぶところだろう」

「それじゃ…んー…」

「だが、断る！」

俺は桃華の顔を手で押しのけると、素早く布団を抜け出した

「ぶー！ちょっと、ひどいんじゃない？あんなに、昨晩は可愛がってくれたのに！」

「だーめ。今日は、やることがあんの」

「やること？」

「そー悪いけど、木と工具。画用紙…じゃなくて、厚紙をくれないか？」

「いいけど。厚紙は都にしかないわよ？」

「そうか…。なら、都に行くよ。地図を書いてくれる？」

「案内しましょうか？」

「そうしてくれると助かるけど、大丈夫？」

「いいわよー。顔を隠せば、問題ないし」

「そうか、ありがとう」

「それじゃ、はい！んー…」

再び、目を閉じる桃華

まだ、諦めてなかったのか

「分かったよ」

「やった！んー…ちゅっ…ふふ…ありがとう」

肩に手を置き、軽くキスをすると桃華は照れくさそうにはにかんだ

「どう致しまして。それじゃ、案内頼むよ？」

「ええ！いいわよ！すぐに準備するわ」

桃華はヒラヒラと手を振ると鼻歌混じりに居間を出る

「俺も準備するか」

顔を洗い、身仕度を整えると縁側で桃華を待つ
程なくして準備を整えた桃華が戻ってきた

「三味線？なに、芸者？」

「そ！女旅芸者♪どう？私って分からないでしょ？」

「確かに、こりゃ分からないな」

顔や肌はほとんど隠れてしまっている

桃華の名残といえば、その美しいボディラインくらいなものだ

「良かった！それじゃ、行きましょ！」

「ああ」

桃華に連れられて商が建ち並ぶ都にやってきた

「本当にバレてないみたいだな。でも」

前を歩く女旅芸人を見つめながらポツリと呟く

「より目立ってるよな？」

桃華とすれ違った男が振り返る、振り返る

中には女連れの旦那まで振り返り、説教を受けている始末だ

顔や肌は隠れているのに、その魅力は消えていないようだ

桃華、まったく恐ろしい子だよ

「どうしたの？今日は人が多いみたいだから、あんまりきよろきよろしてると迷っちゃうわよ？」

「本当に気付いてないのか。この、火が着きそうなくらい熱い視線に」

知らぬは本人ばかりなり、か

「あ、こうすれば安心か」

「ちよっ！」

迷子対策にと桃華が腕を絡めて来る

ああ、周りの男の視線が痛い…

火が着くどころか、燃え尽きてしまいそうだ

「あはは…」

笑顔で腕を絡める桃華に他意は全く感じられない
純粹に善意だけなのだろう

「でも、凄いはねー」

「何が？」

「気づいてないの？イクトを通り過ぎた女の子がみんな振り返ってるわよ？」

「んな、ばかな」

桃華の言葉に苦笑しながら振り返ると、こちらを見つめて沢山の女の子が立ち止まっていた
俺が振り返ったことに気づいた女の子たちは皆、黄色い悲鳴を上げながら走り去ってしまう

「え？うそ！？」

「もう、罪作り♪」

「いで！」

笑顔で桃華が俺の腕を抓ってくる
何やら、ご機嫌斜めなようだ

「選り取り見取りの状態ね？でも、お願いだから、辺り構わず周りの女に手を出すような真似はやめてね？」

「はは…大丈夫だよ。俺はそんなに軽い男じゃなから」

「それは分かるけど…」

「それに、桃華のおかげで理想が上がったみたいでさ。今、ざっと見回しても桃華以上の女の子はいないよ」

「…わ、私以上に綺麗な女の子が現れたらどうするのよ？」

「愚問だな。桃華は日本一の女の子だ。この日本一に認められた唯一の男が認めるよ。どうだ、自信出てきただろ？」

桃華の頭を撫でながら、満面の笑顔で頷く

「っ！？ば、ばか…」

桃華は抱きつき胸に顔を埋めると、消え入りそうなくらい小さな声でそう呟いた

「桃華は俺の理想だ。自信を持って欲しいな」

「……はあ…分かったわ。イクトを信じる。でもね、互いが本当に想い合っているなら、私はいいわよ？」

「それって、俺に好きな子が出来たら桃華は引き下がるって…！？ゴフッ！」

「殴るわよ?」

「もう、殴ってます」

腹に鈍い痛みが走る

今、手加減が一切なかったぞ?

「何で私が降りる必要があるのよ。ここは、一夫多妻よ?まさか、イクトって甘い言葉で誘って、一度抱いたら捨てる人?」

「違うっての。俺の国では一夫一妻が常識なんだよ」

「なにを言ってるの?この世界は上から下まで全部、一夫多妻よ?」

「あー…やっぱり世界が違うんだな」

「どついつこと?」

「まず、桃華は勘違いしてるよ。俺はこの国の人間じゃない。異国の人間だ」

「異国?」

「そう。異国、異世界、未来、パラレルワールドから来た人間だ」

「ぱ、ぱられ…何?」

「パラレルワールド。分かりやすくいえば、『もしも』の世界だよ。俺の世界を例に上げるなら、桃太郎は男だったって話だ」

「私、女よ」

「それがパラレルワールドってやつだよ」

「なるほど。んー、例えば、鬼を倒していない桃太郎や、祖父母に育てられなかった桃太郎がいる世界とかが無数にあって、そのうちの一つからイクトは来たわけね？」

「そう。因みに、俺の世界には鬼を倒していない桃太郎の伝承も伝わってるよ？その桃太郎は『三年寝太郎』なんて呼ばれてる」

「…それ、いや」

「だろうね。でも、とても深い話なんだ。今度、機会があったら話すよ」

「う、うーん。でも、何かこう…」

「確証が持てないんだろ？」

「うん」

「そんな時のためのコレだ」

そう言って持って来ていたバッグから現代の象徴ともいえる物を取り出した

「それ、なに？」

「カメラ付き防水携帯電話だよ」

「かめ…なに？」

不思議そうに首を傾げた桃華は携帯を見つめる

「いいか？動くなよ」

そんな桃華に携帯のカメラを向ける
可愛い顔をフレームに納めシャッターをきった

「ひゃ！？何か音がした！？」

「あはは…防犯用のシャッター音だよ。盗撮とか多いからね」

「ふ、ふーん？よく、分からない…」

「だろうね。百聞は一見に如かずだ。ほら、これが写真だよ」

「しゃしん？ちよっ！何これ！？私が小さな箱に入ってる！？これ、私の魂！？私、死んじゃうの！？」

「はは！違う違う！これは『絵』だよ。その場の状況を一瞬で描いてくれる凄い道具って覚えといて」

画面を見て、驚愕する桃華の頭を撫でるとクスクス笑う
携帯を渡して、操作を教えながら実際に撮らせてみる

「わー！凄い！凄い！この箱、凄いよ！」

まるで子供のように目を輝かせる姿があまりに可愛いらしくて、俺はついつい微笑んでしまう

「イクト！」

「ん？」

「これ頂戴！」

「それはだめー」

「ケチ！」

「それがないと困るんだよ。唯一のライフラインなんだから」

俺をここに送った、リーマンと繋がる唯一の電話。絶対に無くすわけにはいかない

「そんな、異国の言葉で言われても分かんないわよーだ」

「くっ！分かったから、振り回すな！壊れる！」

「大丈夫、大丈夫ー！って、あ……ごめん」

落とした。こいつ、落としかがった

さらに、携帯は通りを行き交う人々に蹴られ、俺たちの前から姿を消した

「ノーッ！」

「ご、ごめん！」

「いいから、探して！」

「は、はい！」

二人とも血眼になって辺りを探すが、携帯電話は見つからない
蹴るに蹴られて何処かの物陰に隠れてしまったのか、それとも誰か
に拾われてしまったのか
どちらにしても、こう人が多くては探すに探せない

「やばいやばいやばい…どうする？どうするよ？俺！？」

「ごめんなさい、イクト…」

本当に反省しているのだろう

桃華は下を向いてしょんぼりとしてしまっていた

この時代じゃ悪用されることもないだろうが、もしも何かあった時
にリーマンと連絡を取れないのは痛い

くっ！どうしたら…

「お困りデスか？お客様？」

「お、お前は！？」

焦る俺たちに、かけられる声が一つ
何かと思い振り返るとそこには、あの時のリーマンが立っていた

「はい！私、困った時のサラリーマンです」

相変わらずの営業スマイルだが、不思議と安心感を呼び起こす

「はい、お客様。大事なライフライン、落としましたよ？」

にこやかに差し出されたリーマンの手には、俺の携帯が握られていた

「あ、ああ！ありがとうございます！」

受け取ると、携帯を確認する

あれだけ落ちたり、蹴られたりしていたのに汚れどころか傷一つない
新品同様の綺麗さを保っていた

「いえいえ。お客様のサポートこそ、当社の仕事ですから」

「本当にありがとうございます。でも、何でここに？」

「お客様の携帯の充電について、今回はお伺いしました」

「あ！そうだ、充電！」

言われて気付いた。携帯を確認すると、バッテリーが一つしか点つていない

「しまった。充電器、持って来てないよ」

「コンセントはありませんけどね？」

「あ、やっぱり？」

電気もない時代だ。コンセントなんかあるわけない

「そんなお困りのあなたに是非紹介したいのがこちら！『ソーラー式充電器』その名も『ソラ子ちゃん！』」

「え？」

リーマンが手を叩くと、人混みを掻き分けて何かがやってきた

「はう…この人混み、面倒デスね。営業さん…ぶっ飛ばしても宜しいでしょうか？」

「駄目ですよ？ソラ子ちゃん。君なら可能な分、洒落になつてませんか。そんな姿を、お客様に見られたりしたら引き取って貰えませんかよ？」

「……我慢します」

目の前に立った金髪の少女は、透き通るようなブルーの瞳で俺を見上げた

「ん？じー…」

「な、なに？」

しばらく、俺を見つめていた少女はリーマンに向き直ると小首を傾げた

「営業さん。このソラの理想ともいえる容姿の人間は誰デスか？も

しもソラのご主人様なら、この身を捧げても惜しくないとソラは思います。もし、違うのなら、どうにもならないジレンマでこの辺り一帯が焦土と化すでしょう」

「あ、安心してください！この人は間違いなく、ソラ子ちゃんのご主人様になる予定の方です！」

「予定、デスカ？」

「わ、分かってください、ソラ子ちゃん。こればかりはお客様が領かなければ、どうにもならないんです！」

「そうデスね。失礼致しました。ソラは、鼠々カンパニーお客様サポートセンター開発部から来ました。お客様専用メイド型アンドロイド『SORACO』デス。ソラと呼んでください」

「…アンドロイド？」

「イエス」

ソラはメイド服の裾をちゃんと摘むと恭しく礼をした

「ソラ子ちゃんは、我が社が技術の全てをかけて造り上げた究極のメイド型アンドロイドです。きつとお客様のお役に立てると思いますよ？」

「ま、待てよ！確か、充電器を紹介してたよな？」

想像していたのは現代でも見たことある、小型の太陽電池決して、メイド型アンドロイドなどではない

「ソラは携帯の充電もできます」

小さな手を差し出してきたので、携帯を渡すと少女は腰のポーチに携帯を仕舞う

ぽむぽむと感触を確かめると、再び俺を見上げた

「え？それだけ？」

「はい。只今、充電中デス。あと三時間二十四分で充電は完了します」

「へえ。まあ、ちゃんと充電出来てるなら問題ないか」

「どうですか？ソラ子ちゃん、気に入って頂けましたか？」

「でも充電だけなら、小型のヤツがあっただろ？」

「私共も、四六時中お客様を見ているわけではありません。ソラ子ちゃんは、お客様のサポートを担当して貰うために造られた究極のアンドロイドなんです」

「もしも、ここで要らないって断れば、この子どうなるの？」

「破棄処分ですね。スクラップ工場で分解後、使える部品は再利用し、あとは焼却処分でしょう」

「え……」

あまりに衝撃的な言葉に、思考が停止してしまう

「べ、別に破棄する必要はないだろ？これだけ可愛いんだ。看板娘として受付係りにすればいいじゃないか？」

「この子は、お客様専用に造られたアンドロイドです。骨格から人工皮膚や性格データ。さらには万能サポート機能、全てお客様に一生涯、お遣いするために造られたアンドロイドなのです」

つまり、俺が必要としなければ、この子の存在自体が無に等しいってこと？

それによつての、破棄処分？

「ソ、ソラはそれでいいのか？」

「それが決まりデス。仕方ありません」

「決まりつて…死ぬんだぞ！？怖くないのか!？」

「怖い…デスよ。でも、決まりなんデス。仕方ありませんよね」

俺を見上げ、ソラは精一杯の笑顔で同意を求めてくる

何だよ、全然、笑えてないじゃないか
何が、究極のメイド型アンドロイドだ
普通の女の子と変わらないじゃないか

「桃華」

「ん？なに？」

俺の後ろに隠れていたが、声に答えてヒョッコリと顔を出す

「桃華はこの子のことどう思う？」

「私は何も言わないわ。答えの出ている者に何を言っても無駄だもの。イクトの好きにきなさい。でも、それはきつと、私の願いでもあるわ」

「桃華…うん、ありがとう」

「いいのよ」

桃華は小さく笑うとまた顔を隠し、俺の後ろに隠れた

「ソラ。お前の全てを暴いてやる」

「ソラの…全てを…」

「俺の元に来い！ソラ！」

「っ…！は、はい！」

手を広げた俺の胸にソラが飛び込んでくる
その小さな体を力いっぱい抱きしめた

「ふふ。よかったですね、ソラ子ちゃん。それでは、お客様。ソラ子ちゃんのこと、宜しく願います」

「任せろ」

「ソラ子ちゃんもお客様の言うことをちゃんと聞いてくださいね」

「はい！営業さん！」

「桃太郎様もありがとうございます」

「いいわよー。あなたにはお世話になったもの。むしろ、感謝するのは私の方。ありがとうね、鼠」

「いいえ。喜んで頂けて何よりです。それではまた、何かありましたら、お伺い致します。今日はありがとうございました。失礼致します」

サラリーマンが指を鳴らすと足元に穴が開く

「グッド・ラット！」

また、謎の駄洒落を残し、サラリーマンは消えていった

「相変わらず、よく分からない台詞よねー」

「そつえば、桃華。リーマンと知り合いだったのか？」

「え？ええ。ちよつとね」

桃華は引きつった笑いを浮かべながら首を竦める
あまり話したくないようだ

「…そうか」

「そんな、寂しそうな顔しないで。いつか必ず話すわ」

「ああ、分かった。待つよ」

「ありがとう、イクト」

桃華は微笑むと、俺の脇に立つ少女に目を落とす

「言つとくけど…簡単には渡さないわよ?」

「…望むところデス」

ソラはギュッと俺の服を掴むと、桃華を見上げ微笑えんだ

「ふ、ふふふ…」

「あ、あのさ。そろそろ、買い物をしたいんだけど」

「あ、そうね。確か、厚紙だったのかしら?」

「ああ。これくらいの厚紙がいいんだけど」

希望の大きさを手で示しながら、頷く

大体、画用紙ってこれくらいだったよな?

「大きいわね。なら、『わらしべ堂』に行きましようか。あそこなら、何でもあるし」

「わらしべ堂?」

「あそこに無い物はない、と言われるほど何でもある店よ。店主も

気さくな人だからイクトも氣にいらんと思っわ」

「そうなんだ」

「何でもって、嘘くさいデスね、のっぽ」

「本当のことよ、ちんちくりん」

「ふ、ふふふ……」

桃華とソラの争いを横目に見ながら、わらしべ堂という名前を思い浮かべる

「まさか、な？」

歩き始めた二人の後を追いかけるながら、俺は現代でも見たことある話を思い出していた

わらしべ堂

桃華に連れられやってきたのは都の端にある大きな店だった
看板には『わらしべ堂』と書いてある

「入らないの？」

「あ、ああ」

看板に書かれた名前を見上げていると、桃華が脇腹を小突いてくる
正気に帰り、頷くと扉に手をかけた

「お邪魔します」

「邪魔するわよー」

「失礼します」

三人が中に入り、声をかけると奥から足音が聞こえてくる

「いらっしゃいましー」

にこにこと微笑みながら、出てきたのは桃華と変わらないくらいの
年齢の女性

おっとり系の綺麗な女性だ

ただ、気になるのはその格好

「なぜ、巫女さん？」

「ここ、お店と一緒に神社もやってますからー」

「あ、そうなんだ」

「そうなんですよ。今日は画用紙をお求めですか？」

「何で分かったの？」

「巫女さんですからー」

「み、巫女さんて…」

「イクト。招喜さんに関しては不思議なことが起きてもそれが当たり前と思いなさい」

「そういうもの？」

「そういうものですからー」

「どうやら、そういうものらしい」

「…で、画用紙だけど」

「これでいいですか？」

「あ、うん」

店主が棚から出したのは、現代でもよく見たことのある画用紙だった。画用紙を受け取り、食い入るように見つめる

「あらー、違いました？」

「いや、合ってるけど…ソラ、見てみて」

ソラに見せると、眉を寄せ画用紙を覗き込んだ

「確かにこれには、ご主人様の時代の物と同じ材料、同じ技術が使われてますね」

「機械も使った感じ？」

「はい。これだけの技術は、この世界ではあり得ないかと」

「だよな？店主さん、この紙ってどこから仕入れたの？」

「それは秘密ですからー」

企業秘密ってやつか

これだけの上等な紙だ

商人からすれば、喉から手が出るほど欲しいに決まってる
これを売れば、そこそこの稼ぎになるだろうからな

「まあ、手に入るならいいか。いくら？」

「ご主人様…」

財布を取り出すと、ソラが俺の手を掴み見上げてくる
え、なに？。その、可哀想なものを見る目

「ご主人様…。この世界でご主人様の世界のお金は…」

「…あつ！？そつだよ！お金、使えないじゃん！」

「ご安心をー。お金はいりませんからー」

「え？」

「この店は交換で成り立つ店ですからー」

「交換？」

「はいー。物々交換ですからー」

「そうなんだ。じゃあ、お願いしようかな。画用紙を頂ける？」

「はいー。何枚に致しますか？」

「えつと…」

「はい！三十枚ですね！ありがとうございます！」

「ええ！？まだ、俺まだ何も言っていないよ！？」

「え？三十一枚ですか？」

「だ、だから！俺は何も！？」

「じゃあ、三十二枚が良いですね？」

「…はい…三十枚二枚でいいです」

「ありがとうございますーす！」

「ひどい…ひどすぎる…」

これじゃ、押し売りと変わらないじゃないか！

「それでは、何と交換しましょう？」

「じゃあ、この全身黍団子で」

桃華を指差しながら、しれっとソラは答える

「ちよっ！？誰が全身黍団子よ！？」

「あ、お断りします。需要が少ないのですらー」

「ずーん…」

店の隅で、桃華が膝を抱えて沈み込んでしまった
見た目によらず辛口なんですネ、店主さん

「と、桃華！大丈夫！大丈夫だから！お前の価値は、俺がよく知ってる！」

「イクト…」

「まあ、体だけなら売れないことはありませんからー」

「身体！？結局、身体が目的だったの！？ひどい…ひどいわ！イク

ト！」

「だー！違うつての！そりゃ…身体も綺麗だけど、俺は桃華の心も好きなんだ！昨日の行為だって、桃華が心から欲しいと想ったからしたんだ！他の誰でもない、桃華じゃなきゃダメなんだよ！」

「……ぼっ……！」

「へ？うおお！？」

耳まで真っ赤になり、ふにやふにやと崩れ落ちる桃華を、慌てて抱きとめる
なに！？俺、何かまずいこと言った！？

「見事な告白ですねー。お姉さんもキュンと来ましたからー」

「うう…ご主人様…ソ、ソラも…」

頬を染めて巫女さんは品を作ると、ほう…とため息を吐いた
うるうるとした熱い視線が三人から注がれる
な、何なんだこれは…

「ま、招喜さん！等価交換の話は！？」

「ああ…そうでしたからー。では、手持ちの品を見せていただいてもー？」

「あ、ああ…」

俺は頷くと、ポケットの中身の物をすべて机に広げる

ボールペン、メモ帳、ハンカチ、ティッシュ、櫛、あとは折りたたみの手鏡くらいなものかなんの変哲もない物ばかり、これでは全部足しても画用紙には届かないか…

バックも開けるか…？いや、ヤバいものも多々あるし、そこは止めとくか

「ふむふむー…おおー！？」

「え？なに？手鏡がどうかしたの？」

「これこれ！これですからー！これを頂きたいですからー！」

「え？ああ、いいけど？」

俺は手鏡を手渡すと、代わりに画用紙を受け取る

「感謝感激ですからー！」

「手鏡なんかでよかったの？」

「どうしても欲しい物があつたのですが、そのためには交換品として”珍しい手鏡”が必要でしたからー！」

「え？それ、ただの手鏡だよ？」

「いえいえー。これは、”あなたが使っていた鏡”ですからー」

「へ？」

「異世界の人が使っていた奇跡の鏡ですからー」

「異世界！？招喜さん！俺のこと知ってるの！？」

「勿論ですからー」

招喜さんは微笑むと、ゆつくりと周りを見渡す

この、大量の物資の中に何か俺と関係する物があるのか？

「まあ、ここから先は企業秘密ですからー」

クスクスと口に手を当て微笑むと、招喜さんは鏡を愛しそうに撫で、
懷に仕舞い込んだ
まるで旧友に出会ったような嬉しそうな表情に、俺は何も言えなくなってしまう

「ご主人様」

「え？なに、ソラ？」

ソラがクイクイと袖を引っ張るので見ると、小さな身体を懸命に伸ばして両手を差し出していた

「ご主人様、ください」

「画用紙を？」

「（じっくり）」

満面の笑顔で頷く少女に画用紙を手渡すと、背中のバックを降ろして中に仕舞い込んだ

「え？ いやいや！ 女の子に荷物を持たせるわけには…」

「ご安心を。ソラは、十トンまでなら余裕で運べます」

「ダンプカー！！？」

「ふっ…機動力でいえば、彼奴らの三倍は上デス！」

「…お前はアレか？ どこか、赤く塗ったのか？」

「ご主人様を想う心は、赤い彗星にも負けなくらい、常に真っ赤デス！」

エッヘン！と自信満々に胸を張る少女に、俺はなんと声を掛ければ正解なのだろうか
とりあえず、ありがとうと呟いて頭を撫でた

「ぼー…ご主人様…」

「ふふ…仲良しこよし、いいですね。羨ましいですから」

頬に手を当て、優しく見守る店主に苦笑すると、手を差し出す

「遅くなつてすみません。俺、月詠郁兎っています。これから、お世話になることも多いと思いますので、宜しく願います、店主さん」

「あらあら、礼儀正しい方ですね。私好みの好青年。合格ですよ。」

店主はニコニコと微笑むと、俺の手を取り見つめてくる

ほんのり桜色の顔が色っぽく見えた

「へ？合格？」

「桃香さん。物々交換しましょう？郁兔さんをくださいな？」

「ええ！？」

「なっ！？冗談じゃないわよ！イクトは私のよ！？絶対に、上げないわ！」

「何を言ってるんですか！？ご主人様は、ソラのモノです！」

「……せめて、物扱いはやめてくださいよ。じゃなくて！俺は誰のモノでもない！俺は俺だけのもんだっての！」

ワラワラと四方八方から掴まれ、揉みくちやにされた俺は、グルグル回る視界の中で高らかと宣ったのだが…

「良いじゃないですか。減るもんじゃなし。そうですね、この”福を呼ぶ狸の置物”と”お金を無差別に招き入れる猫”を上げますから。」

「いらないわよ！イクトがいれば、私は幸せなの！お金だって沢山あるから、問題ないもん！」

「むー、強情ですねー。じゃあ、一晚だけ貸してください！」

「一晚！？一晚でなにする気よ！」

「最近、後継ぎを考えていましてー。子供は、交換では手に入りませんからー」

「ヤル気、満々じゃない！ダメ！絶対、ダメ！」

「そんなー。やっと、理想の殿方と巡り会えたというのにー。できるなら、理想の殿方の子供が欲しいですからー！」

「私だって、そうよ！」

やはり、俺の言葉をスルーしたまま、睨み合う二人

すみません、嬉しいですよ？

嬉しいんですが、俺の意見は通らないんですか？

「……」

と、救いを求めて周り見渡すと、先程とは打って代わって、元氣のないソラが隣に立っていた

「どうした、ソラ？」

「すみません…ご主人様。ソラは…」

キュッとスカートを握りしめ、何かとても悔しそうに唇を噛み締め

ると、俺を見上げた

心配になり、目線を合わせるように屈むと涙に滲む瞳を覗き込んだ

「どうしたんだい？言ってごらん？」

「ご主人様…ソラは…アンドロイドです。だから、子供がつかれない…」

「そういうこと、か」

その小さな手を取り、優しく抱き締めると、少しでも目の前の少女が安心出来るように、ゆっくりと頭を撫でる

「ソラ…」

「……」

「ソラ、大丈夫。子供が出来なくても、俺にはソラが大切な子であることに、変わりないよ？」

「でも…形ある幸せが…」

「確かに、子供は互いの愛の結晶なんていうけど、俺は色々な種類の結晶があってもいいと思うぞ？」

「色々な種類の結晶…？」

「ああ。クサイ台詞になるけどさ、思い出や絆も、立派な結晶だと思う」

「思い出…絆…」

「だからさ、これから沢山の思い出を作っていこうよ。子供がいないことなんか、気にならないくらい、沢山の思い出をさ」

ね？と、微笑みかけると涙を拭いて抱き上げる

「ご、ご主人様？」

「お前、軽いな？それこそ、そこらの子供と変わらないじゃないか？」

「れ、レディに対して失礼デスよ！…あっ」

ワタワタと暴れるソラを、ギュッと抱き締め、頭を撫でる

「ソラ、不安があるなら、いつでも頼れ。その分、俺もお前に頼るから」

「っ…はい」

ギュッと抱き付き、胸に顔を埋めると、ソラはやっと笑顔を見せてくれた

可愛い笑顔…。やっぱり、女の子は笑顔が一番だよな

ほっと一息吐いて、振り返るとそこには

「イクト〜〜！？」

「郁兔さん〜!?!」

二人の鬼が立っていた

「た、助けて、桃太郎さん!鬼が出た!ほら、得意の鬼退治を!」

「こんの…バカ言ってるじゃないわよー!浮気者ー!」

「ひい!?!グハッ!?!」

激しい衝撃を腹に受け、俺は意識を手放した

ひどい、ひどいッスよ…桃太郎さん…ガク…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7239o/>

桃華姫

2011年9月28日12時43分発行